
ツンデレ悪魔の愛情表現

長谷麻紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツンデレ悪魔の愛情表現

【Nコード】

N5931I

【作者名】

長谷麻紀

【あらすじ】

ある日、主人公の少女は非現実的な存在『悪魔』に出逢った。しかも、どうやら悪魔の少年は自分のことを知っているようで…！？

「貴方を葬り去るまでは魔界には還りませんから」——危険思考を持つ悪魔の少年と苦労性の女子高生のお話です。

（前書き）

唐突にアイデアが浮かんだったので、そのまま書いてしまいました。

「…おはようございます、篠宮天音さん」

「…ム力つくほど爽やかな朝ね……悪魔のシオン」

いきなりだが、私の家には自由気ままな召喚悪魔が居候している…

こんな事を他人に言えば、間違いなく「病院の精神科に行け」と言われるだろうが、それが私の“日常”で“真実”なのだ。

最初、私だって全く信じていなかったし、何より私の趣味に【黒魔術信仰】やら【悪魔信仰】なんて文字は無い。

けれど——自分の近辺で、あんな不可解現象を多数も起こされたら、いくらリアリストの私でも降参せざるを得なかった。

因みに、その不可解現象は私への嫌がらせと復讐だと本人は言っていたが…

「…いい加減に私の前から消えてくれませんか？」

「お断りします。ですが…貴方が不慮の事故に遭えば何時でも消えて差し上げますよ？」

——ニツコリ。まさに、そんな言葉が浮かぶ表情で言ってくる。

もう日課となってしまった会話だが、あの悪魔はム力つくほど爽やかに不吉な発言をしてくれた。

しかし、あの俺サマ悪魔に降参しても私は『悪魔』なんていう非現実的な存在は信じない！！

そうキツパリ宣言すれば、アイツは……

『全く…相変わらず怖がりな方ですね』

——とか、ズレた発言をしてくる始末だ。

更に腹立たしいことに、少年の顔を被った悪魔は、現在進行形で私の『不慮の事故』を操作し、此の世から抹殺しようと企んでいる。

今日だって、朝一番に上の階段から落ちそうになったのだ（どうにか、持ち前の反射神経の良さで事なきを得た）

とにかく！今、私が神様に一番お願いしたいことは、あの少年悪魔のしょう…

「また物騒なことをお考えのようで——悪魔のように怖い少女ですね」

どうして悪魔は人間の心の声を聞ける能力があるのか………危機的状況だというのに、ノンキに私はそんな事を考えていた。

いつの間に私の背後にいたのだろうか…？

気配を感じさせない悪魔に怯えつつ、私は反撃の一言に転じることにした。

「なっ…！物騒なのは、アナタの方じゃない！！」

「……………ああ、あれは私の朝の挨拶ですよ」

「あれが“朝の挨拶”！？フザケないで！」

（…危うく三途の川に行きそうだったんだから…！
か弱き乙女に何てことするのよ！）

私が恨みがましい目で、アイツの瞳を睨みつけたが、相手は全く意に介していないようだ。

それどころか、ニヤニヤと嫌な笑みで——俗に言う>悪魔の微笑みくをして私のことを…

「貴女のような……マンモスさえ蹴散らしそうな方が“か弱き乙女”なんて……嘘はエイプリル・フールにして下さい」

「!…どうやら、アナタは身体で分かせた方が良いでしょうね？バカ悪魔さん？」

——今の言葉で、完全に私はプツンと制御していた感情がキレた。わざわざ、こちらが冷静に話し合いで優しく(?)注意してあげたというのに……

ますます、生意気にも私に言葉の暴力を仕掛けてくるなんて……

いくら優しい人格者の私でも、我慢の限界というものがある!!

「今日こそ、消滅して魔王の元に召されなさい！」

「おっと…それは困りましたね。私は貴方を苦しめて逝かせるまで消滅しませんから」

「私こそ、アンタに逝かされるなんて真っ平よ」

段々と頭に血が上ってきた私は、普段の言葉遣いからかけ離れたものになった。

とにかく、このバカ悪魔を早く何らかの方法で消滅させなければ、

明るい私の未来は永遠にない…

「本当に野蛮な方ですね。来世は猿でしょうか…？」

「…減らず口を叩くのは、今日までかしら、ねっ！」

毎度の事ながら、アイツの余裕そうな態度は、見事なまでに私の神経を逆撫でしてくれる…

不意打ちで一発アイツの顔を叩いてやろうとした時、私の右手は悪魔に強く掴まれた。

「！何す…！」

「あまり私を怒らせないで下さい？野蛮なマンモスの貴方を私が愛している事実をお忘れですか？」

「うっ…！」

——そんな昔の記憶なんて遙か彼方に追いやっていた私は、その一言で動きを止めてしまうのだった…

バカ悪魔・シオンが、私のことを『恋愛感情で大好きですよ』と抜かしたのは、確か初めて会った日…

だけど、そんな大事な“愛の告白”とやらは、次の瞬間に起きた物騒な出来事でチリになった。

あまりの惨事に驚く私に、アイツは爽やか少年のようにこう抜かした。

『はっ…？』

『ですから、先程も申したように、私は貴方を愛していますから…抹殺します。早く貴方が不慮の事故に遭うよう祈りますよ』

何処をどうしたら、この世の中に好きな人を抹殺しに来る悪魔（人間）が存在するのだろう…

私は密かに天にいるかもしれない神様を恨まずにはいらなかった。そして、宣言通りに悪魔の少年は魔力とやらを使い、私の家に従兄として住みつくど、あらゆるものを操作して私が“不慮の事故”に遭うようにした。

しかも、その際には嫌みのオンパレードを言っでは、必ず私のことを『小猿』や『マンモス』などと呼んできた。

だから、そんな甘い記憶なんてものはすっ飛んでいたのだ。

「いくら私のことが大好きとはいえ……天音は冷たく虐めますね」

「ちょっと待ちなさい！私はアナタなんて大嫌いよ！変な想像してないでくれなしかしら？」

寒気がするような発言をかましてくれたシオンを私は怒鳴った。

この悪魔を私が『大好き』という台詞を言われるなんて心外だし、ジョークにも程があると思う……

……というか、何処をどうすれば、そんな自信満々な捏造発言が自分で出来るのだろうか？

「……まるで、イタイ悪魔ヒトのような目で、私を見ないでくれませんか？」

「あら、ごめんなさいね」

半ば棒読みのように、私はオレ様のように態度を振る舞う可哀相な悪魔に謝ってあげた。

それでも、落ち込んでいる存在には仏様のようには私は優しいのだから。

けれど、私の優しさに気がつかない悪魔はムツとした顔をしたと思えば…

—— チュッ ——

「ななっ…！」

「貴方が可愛くないからですよ？私を馬鹿にするなど………あと一億光年早いと思いきりなさい」

あのオレ様悪魔に…神聖な頬に無断でキスをされて、ショックのあまり私は風化してしまった。

そして、思ったのだ——悪魔なんていう非現実的で身勝手な存在が…

「悪魔なんて…悪魔なんて大嫌いだ――！！！！」

END

（後書き）

悪魔の少年と女子高生の話を書くのは、久しぶりで楽しかったです。
出来れば、何故シオンが天音に執着している本当の理由を書きたい
です。

それでは、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5931i/>

ツンデレ悪魔の愛情表現

2011年2月2日14時51分発行